

平成2年度定例講演会講演要旨（4月）

渡島大島の植物

佐藤 謙

1. 調査地概況

<位置> 渡島半島の西方約50キロメートルの日本海上、北緯41度30分、東経139度22分、

<規模> 東西約4キロメートル、南北約3.5キロメートル、最高標高737メートル

<地質・地形> 3重のカルデラ構造をもつ成層火山……三角錐、急傾斜

（勝井・佐藤1970、勝井他1977）

(1) 東山（江良岳、737メートル）……玄武岩と安山岩（更新世末—完新世初）

(2) 西山（清部岳、722メートル）……玄武岩と安山岩（完新世）

難波岬溶岩流（2本の溶岩堤と溶岩デルタ形）

(3) 中央火口丘（寛保岳、648メートル）……東西の側火口から2本の溶岩流、西のものが最新でヤケクズレ溶岩流という（1741年から1790年まで18世紀に噴出した玄武岩）

<気候> 暖かさの指数40度から65度と算出される……標高600メートルを堤にして上方が亜寒帯、下方が冷温帯とみなされる

2. 植物相（フロラ）……約150種、少ない（鮫島1957、菅原1958、佐藤・鮫島1984、佐藤1989a）しかし、高山植物……シコタンスゲ、ムラサキモメンズル、ミヤマオダマキ、ガンコウラン、チシマゼキショウ、シモフリゴケなど

南方の植物……オニヤブソテツ、ホタルカズラ、ハハコグサなど、

その他の希産種……クシロチドリなど

3. 植生……遷移初期の草原植生またはコケ植生（鮫島1957、佐藤・鮫島1984、1986、佐藤1989a、b）

(1) 海岸断崖……オニヤブソテツ群落

(2) 砂浜……ハマヒルガオ群落

(3) 山麓溶岩デルタ

ハマツメクサーエゾヒナノウスツボ群落

マイズルソウ群落

ヤマブキショウマ群落

エゾニワトコ群落

(4) 山麓凹形斜面……ススキーツリガネニンジン群落

(5) 裸地への前面……エゾキリンソウ群落

(6) 山腹から山頂部（標高200—300メートル以上）

シコタンスゲ群落……疎生植分、ススキとアマニューが多い植分

シモフリゴケ群落……疎生、特にハハコグサ、アキメヒシバの植分は高地温と結び付く

4. 植生の特徴……特に(6)にシコタンスゲ、ムラサキモメンズル、ミヤマオダマキなどの高山植物が比較的標高からみられ、ハマオトコヨモギ、エゾオオバコ、ハマハタザオ、ハマウツボ、エゾスカシユリ、チシマキンバイなどの海岸植物が高標高までみられる。……遷移初期、他に類例がない種組成をしめす植生。

1938年に放したウサギが選択的に食べる植物があるので偏向遷移が認められた。過去にヨモギ群落が消滅し、1955年から1982年にはノダイオウ群落が消滅した。ウサギはオオミズナギドリと巣穴の競争をしており、それを排他しつつある。

5. 人間生活と関わり

1982年に灯台、ハリポート、階段の工事が行なわれ、その攪乱された所から帰化植物のアメリカオニアザミが侵入、定着した。オオミズナギドリ繁殖地として国指定天然記念物級の価値があるので、この点からの再指定が必要になる。植生への人為の影響は先の帰化植物やウサギの例のように間接的であろうと大きなものとなる。従って1990年から第4種避難港の工事が始まるので、原生の自然に人為の影響が心配される。

(1990. 4. 14. 友の会総会・於北大)

カントリーヘッジの国から

五十嵐 博

何年か前に一冊の絵本を買った。今は会社の本棚に他の絵本と共に並んでいるその絵本は、イギリスのジョン・T・ホワイトが文章を、エリック・トーマスが絵を書き、鈴木晶が訳した「カントリーヘッジ」という本である。

昨年12月の初めの頃、仕事の関係もあり、ナショナル・トラストやバードサンクチュアリを見るため英国を一週間程旅行した。

ロンドンに三泊した後は、イギリスの郊外の田園風景やウエールズ地方のある西海岸などを見て回った中で印象強く残っているのが、今年の干支である羊達の群れと、彼等が逃げ出さないための石垣や生垣、木柵などであった。

この生垣のことを、英国ではカントリーヘッジと呼び、かの地の景観構成の特徴ある姿のひとつとして有名である。

あまりにもハードスケジュールのため、生垣のいい写真が撮影できなかったが、絵本にあるように、サンザシの木などを主体にツルバラなど比較的トゲのある、実のなる木を多く使っていた。

きれいに刈り込んでいる物や、手入れのまったくない所もあり変化に富んでいたが、羊の群れと牧草の緑、そして、カントリーヘッジのます目や丘に描く曲線の美しい流れは人工美とはいえず、すばらしいものであった。

サンザシは英名をメイフラワーと言ひ、アメリカ大陸を発見した有名な船の名前と同じである。

白いその花が、5月の花そのものである。トゲの多い木は羊を飼うには都合がいい。森を切り開き牧草地に切り替えた代償に小鳥達のために木の実はプレゼントできる仕組みでもある。

また、生垣があることで緑の計画の中で、この

カントリーヘッジを作る事を奨めている。野鳥を誘致するためには食餌木を植栽することが、良くいわれるが、同時にブッシュを作ることも重要である。

ひさしぶりに、この本を開いて読んでみるとこんなことが書いてある。「かつてないほど、鳥やけものは垣根を独占しています。生垣は自然の鎖であり、国じゅうに広がっている50万マイルのけものみちです。上着の哺乳類の全種類の半分、爬虫類の全部、鳥類の5分の1が、生垣に見出されます。中略。約40種類の鳥が垣根に巣を作り、えさもそこで得ます。垣根は野生の花の陳列棚でもあります。その種類は、森よりも、野原よりも多く、一千種以上が知られています。」イギリスにおけるカントリーヘッジは自然保護の上からだけでなく、かつては燃料である薪を供給したり、その周辺の草花が民間の漢方薬のように利用されたりもしてきた。

今後、時代の流れの中で自然環境を創造する時が近付いていると思われる。カントリーヘッジの考え方も、その一つの手法として採用したい自然環境創造手法(エアコップ)の例ではなかろうか。

